

~~~~~  
書 評  
~~~~~

Evanoff, R. J.
*Bioregionalism and Global Ethics: A Transactional
Approach to Achieving Ecological Sustainability,
Social Justice, and Human Well-being*
(Routledge 2011)

抱 井 尚 子*

本書の背景

今日、「地球環境問題」が高い関心を集めている。マサチューセッツ工科大学の研究者が行ったコンピュータ・シミュレーションの計算によって、現在のペースで人口増加が進み、人類が工業化を進めた場合、2035 年を堺に、それ以降天然資源は急激に枯渇、21 世紀中盤には環境汚染がピークを迎え、食料不足は人口の急激な減少をもたらす、という予測がなされた。この報告は、1970 年代初頭に『成長の限界——ローマクラブ「人類の危機」レポート』として世に送り出された。あれから 40 年、地球上では未だに経済開発と人口増加が進み、工業化の波は経済新興国の参入によりさらに広範囲に広がっている。これにより、我々が直面する地球環境問題はますます深刻化しているといえる。『成長の限界』は、今後大きな変革無しには、2100 年までに人類が悲劇的な破局を迎えるという警鐘を鳴らしている。

人類が直面するこの地球環境問題は、近代化によってもたらされた負の副産物といえる。産業革命以来の近代化の波は、伝統的共同体を解体し、都市化と

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

国民国家化をもたらした。最新のテクノロジーを導入した産業化というプロジェクトは国家に富をもたらし、人々は大量消費能力と生活水準の向上を手に入れた。一方で、地球上の限りある資源は枯渇の一途をたどっている。また、経済発展による物質的豊かさの恩恵を受けてきたのは、地球上のわずか5分の1にあたる先進国に暮らす人々に限られている。それにもかかわらず、近代化の結果がもたらす地球規模の環境破壊は、残り5分の4の国々の人々をも容赦なく巻き込んでいく。さらに、これらの5分の4の国々が今後先進国並の経済成長を果たそうとすれば、更なる環境の悪化を招くのは必至である。今、我々は、環境保全と開発の狭間のなかで、人類を含む地球上のすべての生命が共存・共生するために進むべき道の選択を迫られている。

本書は、地球規模で深刻化する環境問題を人類がいかに乗り越えていくべきかという問いに対する解を、「生命地域主義」(bioregionalism)の理念に求めるものである。そして、この新たな枠組みにおいて、環境保全、社会的公正、そして人類の幸福のすべてを矛盾なく実現するために必要となる「地球倫理」(global ethics)の地域を超えた共同構築を、「異文化間対話」(cross-cultural dialogue)を通して行うことの重要性について議論するものである。本書の背景には、先進国が発展途上国の経済発展を支援することで発展途上国の生活水準を先進国並に引き上げるという、現在優勢な「開発パラダイム」(development paradigm)に対するエバノフ氏の危機意識がある。このパラダイムが抱える矛盾と限界の一端は、2011年ニューヨークのウォール街から世界各地に飛び火した反格差デモを通して、先進国においても露呈し始めている。グローバル化が加速する世界経済の流れの中で起きたこの象徴的な出来事は、今後この経済の流れに派生する課題に我々がいかに対峙すべきかという問いを投げかけている。そしてこの問いは、「人間の幸福とは何か」という根源的な問いに繋がるものであろう。本書は、まさにこの根源的な問いに対する著者なりの答えを提示するものである。

本書を通して著者は、グローバル経済のもつ本質を鋭く考察し、その限界を明らかにしたうえで、これに代わる持続可能な経済システムのあり方を模索す

る。著者は、「生命地域主義」とよばれる理念に基づく政治経済システムの可能性を訴える。このシステムにおいて人間は、グローバル経済とは距離を置いた自給自足経済と民主的意思決定プロセスに支えられた地域社会において、環境に相応しい質素な生活を送ることを目指す。さらに、地域を越えたグローバルなつながりの基盤を、経済活動ではなく人類の幸福に不可欠な「地球倫理」の異文化間対話を通じた共同構築に求める。本書を通して著者は、グローバル経済の結末には、限りある地球資源の枯渇と一握りの限られた人間のみが富を享受する社会的公正しかないかと警告する。

エバノフ氏は、生命地域主義の理念を、グローバル化によって生み出された社会問題・環境問題の解決に向かうための思想・活動の新たな枠組みとして位置づける。そして、本書において氏の議論を支える哲学的基盤は、米国プラグマティズム哲学を代表するジョン・デューイにその起源をもつ「トランザクション概念」(transactionalism)にある。この概念を分析的視座の中心に据えることによって、氏は、「個人」、「社会」、そして「環境」の不可分な関係性の中から、そのどれにも偏重することのない人類の新たな有り様を模索しようとしている。

本書の構成と骨子

本書は6部構成で、合計16章からなる。

第I部「地球倫理への生命地域主義からの展望」の2つの章では、本書を通じて議論される2つの中心テーマである「生命地域主義」と地球倫理の共同構築を可能とする「異文化間対話」についての導入がなされている。

第1章「生命地域主義と支配的な開発パラダイム」では、既存の開発パラダイムのもつ前提とその限界を解説し、その上で開発パラダイムに代わる枠組みである生命地域主義パラダイムの導入を試みている。

第2章「地球倫理に関する異文化間対話」では、政治哲学としての生命地域主義が、異文化間の対話による地球倫理の構築にいかに関与し得るかについて、その概要を提示している。

第II部「生命地域倫理のトランザクショナルな枠組み」では、本書が採用す

る認識論的枠組みとしてのトランザクション概念について、3つの章を通して解説している。

第3章「トランザクション概念と生命地域主義倫理」では、環境問題の議論においてこれまで欠けていた、個人、社会、そして環境の関係を有機的に捉えるトランザクション概念的視点の枠組みとして、スタイナーの「人間と環境の関係理論モデル」を紹介する。ここで登場するスタイナーのモデルは、本書の全章を通じてその議論を支える重要な役割を果たすものとなっている。

第4章「自然と社会の共進化」では、前章で紹介したトランザクション概念とプロセス哲学およびプラグマティズム哲学に共通する「全体論」(holism)の分析視点を、環境と生命体、そして環境と文化の「共進化」(coevolution)という概念につなげて議論する。ここでは、環境、生命体、文化が互いに影響し合いながら創造される共進化の関係にあるという前提が採られている。

第5章「自然環境の社会的構築」では、環境哲学の議論において本書が採用する認識論的立場としての構築主義について議論する。ここで用いられているのは、リアリティの外在性を否定しない実在主義の立場を容認する構築主義の立場である。この立場は、環境問題の存在を現実のものとし、環境倫理、環境に関する知識、環境に付与する価値などは、すべて社会的に構築されるものであると考える。

第III部「自己、社会、そして自然の調和」の3つの章では、トランザクション概念の視点を環境倫理の議論に投影し、さまざまな環境思想がもつ固有の考えを有機的に関連付けることで、より包括的な環境倫理を構築する可能性を模索している。

第6章「人間中心主義と生態圏中心主義を越えて」では、トランザクション概念的視点をもつことにより、「人間中心主義」(anthropocentrism)対「生態圏中心主義」(ecocentrism)といった、これまで二元論的に議論されてきた環境倫理の中の対立思想に折り合いをつけることを試みている。

第7章「対話的倫理と道徳的考量性」では、人類自らの生存目的にとって正当な自然への介入とそうでないものを、コミュニケーションによる合意形成プ

ロセスを通して決定する必要があることを議論している。ここでは、環境倫理の議論においてしばしば論点となる自然がもつ価値に関して、「内在的価値」(intrinsic value)と道具的価値(instrumental value)の対立をトランザクション概念の視点から乗り越えようと試みている。

第8章「土地倫理に関する異文化間対話」では、急速にグローバル化が進む今日において環境倫理に関する異文化間対話がいかに重要であるかを強調している。ここでは、アルド・レオポルドの「土地倫理」(land ethic)をあらゆる地域に普遍的に適用可能な単一の環境倫理規準とするような普遍主義の流れを批判し、文化間に存在する環境に対する考えや関わり方の多様性を認めた上で、目の前にある環境問題を異文化間対話によってともに解決して行くことを提案している。

第IV部「地球倫理としての生命地域主義」の3つの章では、既存の開発パラダイムに代わる新たな枠組みとして生命地域主義が有望である理由を、生態系の持続可能性、社会的公正、および人類の幸福の3つの角度から議論する。

第9章「生命地域主義と生態系の持続可能性」では、開発による環境破壊がもたらす「成長の限界」は技術革新によっても乗り越えることができないことを、さまざまな統計データを根拠に議論している。結果として、定常状態経済(steady-state economy)の確立を前提とする生命地域主義への移行が、環境と人類の共存のための必然的な選択であることを主張している。

第10章「生命地域主義と社会的公正」では、開発パラダイムがもつ消費主義に基づく「よい暮らし」や「社会的公正」という概念の捉え直しを、代替パラダイムとしての生命地域主義の視点から行う。生命地域主義パラダイムにおいては、自給自足経済と民主的意思決定プロセスに支えられた、グローバル市場とのつながりをもたない地域社会において、環境に相応しい質素な生活を送ることこそが、社会的にも公正なよい暮らしであると主張する。

第11章「生命地域主義と人類の幸福」では、健康やクオリティ・オブ・ライフによって定義される人類の幸福を、生命地域主義の視点から捉え直す。人類の幸福を大量消費に還元してしまう開発パラダイムが招く社会的不正と生態

の持続可能性における限界を指摘したうえで、生命地域主義パラダイムがもつ自己実現、他者や自然との関係構築といったニーズに投影される幸福感が、これらの限界を乗り越え得ることを主張する。

第Ⅴ部「グローバルな文脈における生命地域主義」の3つの章では、生命地域主義に則って、どのような政治体制や経済活動が生命多様性と文化的多様性の存続、社会的公正、そして人類の幸福を可能にし得るかについて議論する。

第12章「生命地域がもつ多様性の保護」では、自然と文化の関係を共進化するものとして捉え、さまざまな生命地域がもつ多様性の保護を導く環境倫理のあり方について議論する。ここでは、地理思想の一つである環境可能論 (environmental possibilism) と生命地域主義を導く規範的倫理観との親和性について議論する。

第13章「ローカル経済の活性化」では、グローバル経済に代わるスキームとしての生命地域主義に根ざした経済活動について議論する。ここでは、特定の環境において生物種が無期限に継続して生存できる規模を示す「環境収容力」(carrying capacity) が限度を超えない経済発展を目指す上で、地域社会において地産地消を前提とする自給自足経済への移行がいかに重要であるかを説く。

第14章「ローカルに活動し、グローバルに協働する」では、生命地域主義パラダイムにおいては、「主権」という政治問題を、伝統的な「国民国家」から地域社会という限定された範囲に移譲することで、意思決定のプロセスへの当事者である市民一人ひとりの参加が可能になることを説いている。さらに、地域・文化の壁を越えて起こるグローバルな問題については複数の地域が連合体制を組むことで協働的に対応していくことが提案されている。

第Ⅵ部「グローバル化のあるべき姿」の2つの章では、本書の締めくくりとして、生命地域主義の目指すグローバル化のあるべき姿について議論する。

第15章「地球倫理再考」では、生命地域主義に基づく新しい地球倫理のあり方について議論を展開している。ここでは、開発パラダイムが生み出してきた、自然と人間、人間と人間の間に存在するあらゆる形態の支配関係を排除し、真に非階層的・民主主義的で、環境保護的な地域社会の構築を推奨する新しい世

界秩序のあり方を模索する。

最終章である第 16 章「生命地域主義的‘世界秩序’への移行」では、生命地域主義パラダイムに移行するために必要な具体的な「変革」について、その概要を述べている。ここでは、地方への政治経済権力の分散、そして、市民一人ひとりの政治的意思決定プロセスへの参加といったシステム全体の徹底的な変革に加え、このパラダイムを支える手段として、すべての市民を巻き込んだ水平コミュニケーション、ローカルからグローバルへとボトムアップに意思が伝達される垂直コミュニケーション、そしてグローバルな文脈における異文化間の活発な対話の必要性についても訴えている。

本書の貢献

本書の主たる貢献として次の 3 点を挙げたい。

第 1 点目は、本書の主張がもつ斬新さとスケールの大きさである。環境問題の改善に向かって本書が提案するアプローチは、既存のパラダイム内部で行う経済的・技術的な小手先の改革ではない。開発パラダイムに代わる生命地域主義パラダイムへの移行という、いわば、視点のコペルニクス的転回ともいえる抜本的な改革案を提出しているところは極めて斬新であり、読み応えがある。また、グローバル経済とそれらを推進する国際連合、世界貿易機関、国際通貨基金といった国際機関の機能に鋭く批判的な考察のメスを入れ、現実存在する世界規模での階層化と貧困の問題、そして環境破壊の元凶が実はこれらの国際組織の活動によって作り上げられたグローバル経済のシステムそのものにあることを指摘するといったところにも、読者に視点の大幅な転換を迫る本書のスケールの大きさが表れている。

第 2 点目は、本書で貫かれている環境倫理に対するトランザクショナルのアプローチの有望性である。この視点によって、環境思想においてこれまで二元論的に議論されてきた「人間中心主義」対「生態圏中心主義」といった対立が本書においては弁証法的に乗り越えられようとしている。対立する概念から新たな相乗作用（シナジー）を生み出すトランザクショナル概念のアプローチは、本書

が人間、社会、自然の関係を包括的且つ有機的に捉えている点に一貫して表れている。トランザクション概念の視点を中心に据えて環境倫理の議論を展開することで、本書は、特定の環境思想や価値観に対する弁護や批判に終始するといった非生産的で閉塞的な議論に陥ることなく、より意欲的で発展的な環境倫理の議論を展開しているといえる。

第3点目は、本書が「生命地域主義」の思想を「異文化間の対話」というコミュニケーション学的視点と融合することで拡張している点である。グローバル経済から距離をおいた自給自足経済の充実、政治的意思決定プロセスへの全市民の徹底的な参加、文化的多様性の維持、といった社会の有り様を奨励する生命地域主義は、特定の生命地域内で発生する諸問題には効率的に対処することが可能であるが、地域を超えた広範囲におよぶグローバルな問題に対峙する際には限界がある。この限界を、異文化間の対話を通して地域・文化を超えて協働的に解決していくことを志向するのも本書のもつ新しい視点といえる。この視点は、哲学者として環境倫理に関心をもつ傍ら、本学において国際コミュニケーション学の教鞭をとってきたエバノフ氏が、これまでの自身の研究と教育実践から生み出したまさに「知のシナジー」であるといえる。

むすび

本書は、異文化間対話を通じたグローバルな協働体制のもとに生命地域主義に基づく政治経済システムを確立し、環境と人類が共存可能な公正な社会の構築を目指すことを提案するものである。開発パラダイムがもつ限界と矛盾に鋭いメスを入れ、ライフスタイルのみに留まらない価値観のコペルニクス的転回が人類には必要であることを、本書は我々に説得力のある議論を通して説いている。

本書におけるエバノフ氏の主張を、ユートピア的な理想主義者の見解に過ぎないとやり過ごすことは簡単である。しかし、実際にはエバノフ氏自身も指摘するように、地球上のすべての人間の大量消費を支える経済成長が今後も半永久的に続くであろうと考えることのほうが、非現実的な幻想に過ぎないともい

える。本書は、限界を迎えた既存の開発パラダイムから我々が脱却し、人類と環境との共生を可能にする新たなパラダイムへ移行するための水先案内人の役割を果たすものである。環境問題の解決に時間の猶予がなくなりつつある現在、環境と開発の狭間で混迷する我々に本書が与える影響は絶大である。また、本書が英語で執筆され世界的にも権威のある英国 Routledge 社から出版されていることから、この影響力もグローバルな範囲におよぶ可能性を十分に秘めている。本書が我々に貴重な示唆を与えるものであることは言うまでもないが、グローバル経済のあり方を巡って数々の難題を突きつけられた今だからこそ、その主張に触れることがことさら意義深いものに思える。

(評者：国際政治経済学部国際コミュニケーション学科 抱井 尚子)